

フロントランナーの

系

Descent  
of  
Frontrunner

譜

# カイコの 染色体末端から 広がるキャリアパス



安西智宏

先端生命科学専攻 2004年3月博士課程修了、  
博士(生命科学)  
現職：東京大学グローバル COE プログラム/  
本部 TR 機構 特任講師  
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CMSI>

私は現在、ベンチャーキャピタリストとして投資ファンドの運営や大学発ベンチャーへの経営支援をする傍ら、本学の医学・工学・薬学系の博士課程学生向けに国際化や産学連携推進、マネジメント教育のカリキュラムを担当する教員をしています。一見すると完全な「産業人」との印象を持たれるかと思いますが、そんな私が新領域での5年間をかけて追いかけて続けたのは「カイコの染色体末端」という非常に基礎的なテーマでした。本稿では過去と現在の私のキャリアを繋ぐ「絹糸」をひも解いていきたいと思ひます。

私は先端生命科学専攻の大学院生募集が開始された1999年に入学した1期生でした。新領域という名前にふさわしく多くの学科の教員が参画し、スタート時の高揚感や混沌とした雰囲気をよく覚えています。学生と教員間の交流も深かったうえ、「能動的アティテュード」が強く尊重され、学生の意見も積極的に取り入れられました。いま思えば教員も「どんなカリキュラムを提供すべきか」など、手探りの状態だったのではないかと思います。多様なバック

グラウンドをもつ教員や学生と連携する「学融合」の機会を得たのはその後のキャリア形成にも大きな影響を与えました。

新領域での私の研究活動の全ては、鱗翅目昆虫であるカイコの染色体に存在する転移因子に向けられました。

私はその中で、染色体末端にあるテロメアという部分の反復したDNA配列を切断する酵素を世界で初めて単離することに成功しました。生命棟の誰よりも頻繁に出入りしていたRI室内で、その活性を見出した時の感動は今でも忘れられません。幸い

にして5年間で共著を含めて4報の論文を発表できましたが、国内外での学会発表や論文発表によって培われた研究者とのネットワークは今でも貴重な財産です。

私の恩師で、現在も同専攻で蝶やカイコといった昆虫の研究に従事しておられる藤原晴彦先生は成果の応用展開にも積極的で、私も常に自分のテーマの実用化を視野に研究を行い、時には産学連携のプロセスに関与することもありました。「基礎的な研究領域から生まれた技術の種こそが世界を驚かせる成果へと結実しうる」ということを実感する一方、実用化の過程には産業界との言語の違い、資金や人材の問題など数多くの課題がある事を肌で感じました。この経験は私が「大学発の技術を事業化する触媒」になって、基礎研究者が自身の研究に専念できる環境を作ること」を自分のライフワークに定める大きなきっかけになりました。

産学連携の触媒となるべく、卒業後に外資系経営コンサルティング会社の門を叩き、現在は大学発ベンチャーという現場で泥まみれになりながら、新領域で得たサイエンスの感動や産学連携の現場の雰囲気を少しでも学生に伝えるべくカリキュラムの構築に当たっています。10年前、大学院生として先端生命科学専攻という新たな教育の試みに立ち会った私は、いま教員の立場で「学融合」、そして「能動的アティテュード」の重要性を深く噛みしめる日々です。



1期生による検見川合宿でのスポーツ大会



クレタ島の国際学会での歓迎レセプション



クレタ島の国際学会場からエーゲ海を望む